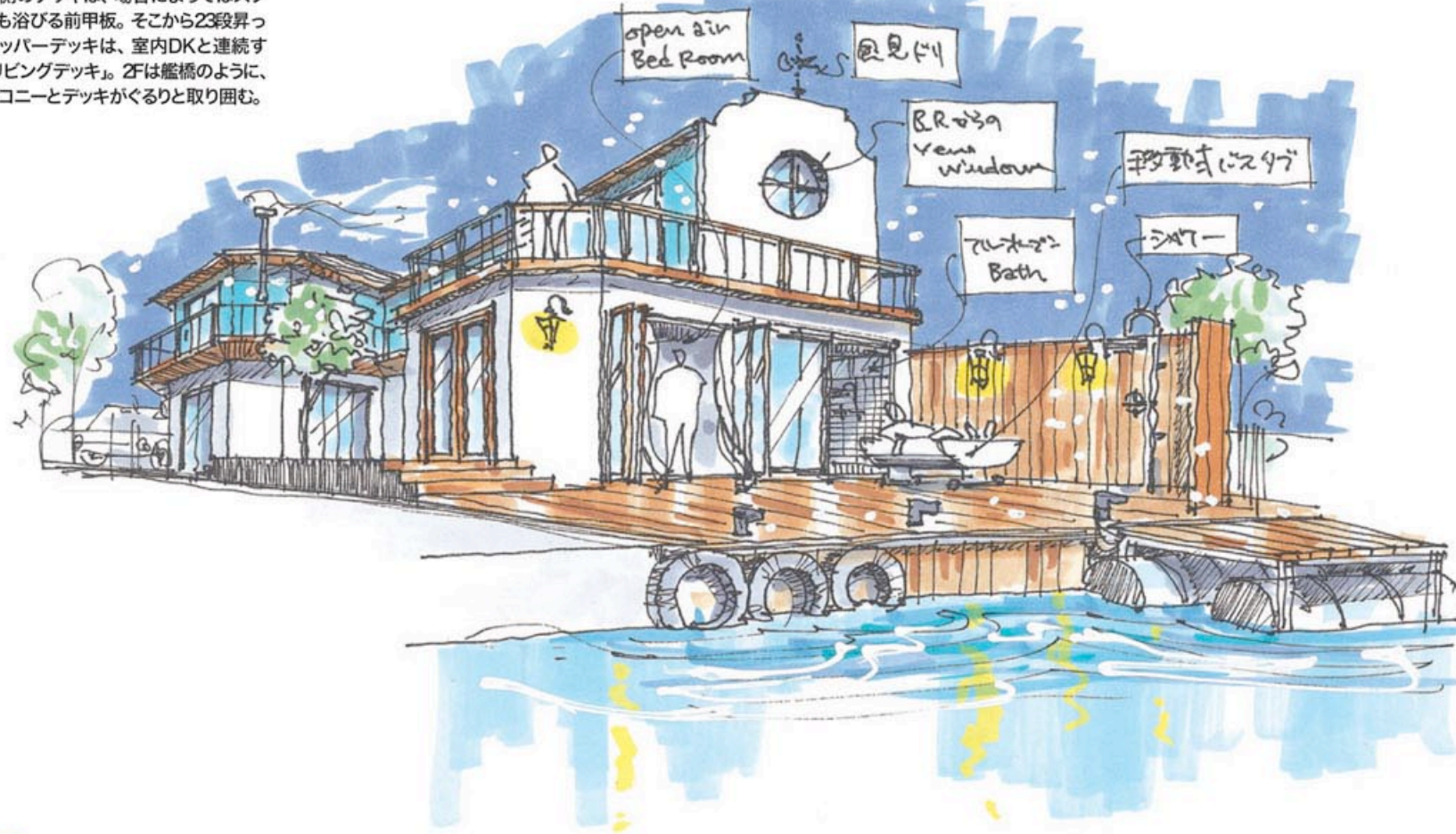


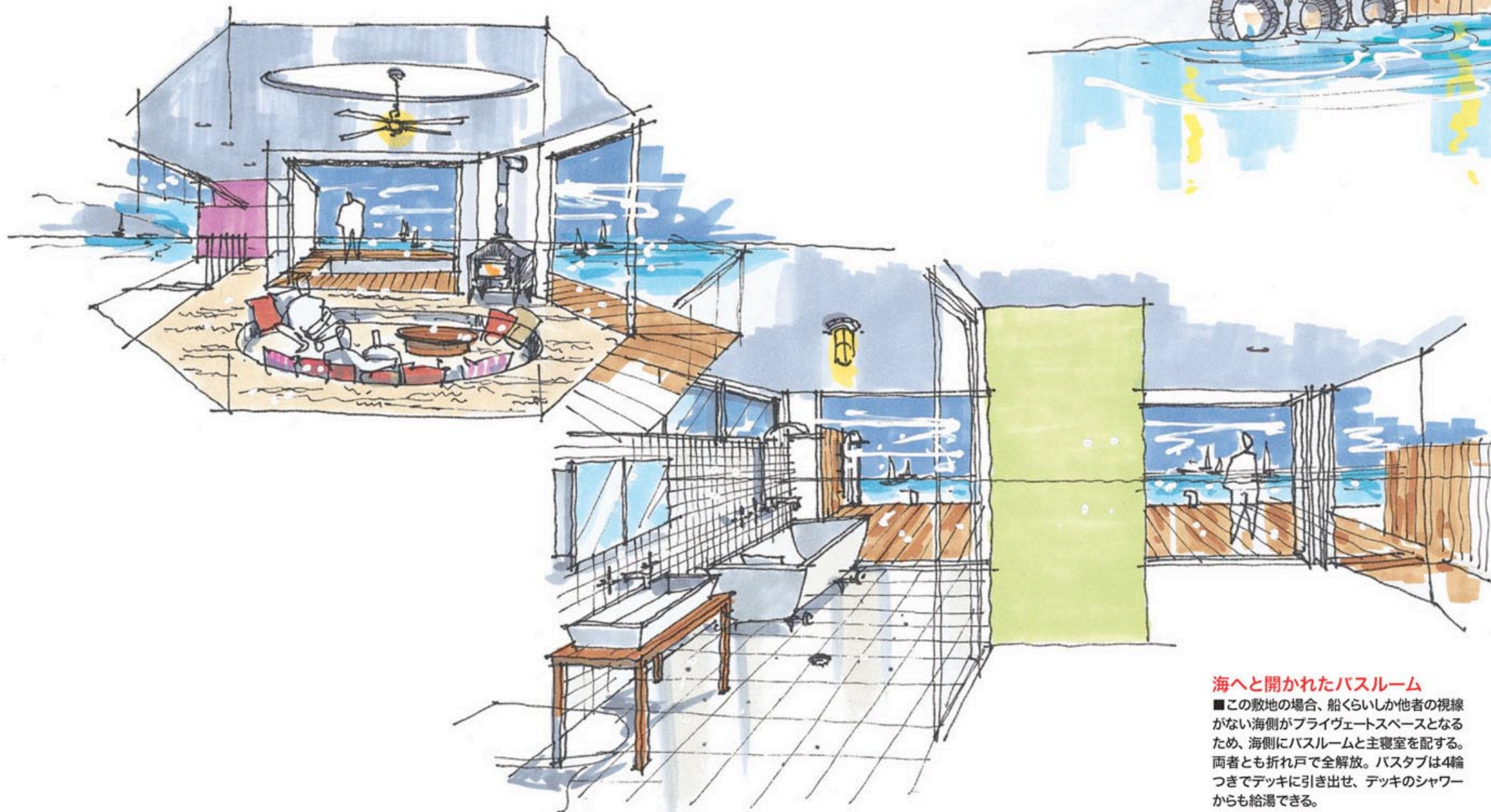
**イメージと機能は「船舶」**

■海側のデッキは、場合によってはスレインも浴びる前甲板。そこから23段昇ったアッパーデッキは、室内DKと連続する「リビングデッキ」。2Fは艦橋のように、バルコニーとデッキがぐるりと取り囲む。



**2Fラウンドリビングより「額絵的」オーシャンビュー**

■16畳のリビングにソファを置くと用途が限定されてしまう。床を楕円に掘り、どこにでも座れるようにすることで、マルチユース、広さ、360度パノラマが得られる



**海へと開かれたバスルーム**

■この敷地の場合、船くらいしか他者の視線がない海側がプライベートスペースとなるため、海側にバスルームと主寝室を配する。両者とも折れ戸で全解放。バスタブは4輪つきでデッキに引き出せ、デッキのシャワーからも給湯できる。

海との触れ合いが(ダイレクトに、ある種のヴェール越しに)幾重もある家。

滝本学(滝デザイン研究所)  
 TEL:045-663-0061 http://www.t-dg.jp



■43歳のバリバリ。米国で建築を学び、モットーは「住宅は生活の甘美さの増幅装置であるべき」。そうでなければリスクを負って家を建てる価値はなかる。個人住宅のみならず、集合住宅、洋館、リゾートのコンセプトメイクからファニチャーのR&Dまで、広汎、かつ国際的に活躍している。



**海と暮らしのインターフェイス**  
 ■この家のご馳走は「海」であるといえ、家のどこからでもべったり海と接するなんて贅沢でも上質でもない。海との触れあいの質、深さを、多層的に用意した(本文参照)。

**3つのエントランス**  
 ■屋内に入る、3つの動線を設ける。たとえば①、家に帰り門扉を開けると海が見える。リビングデッキの向こうに広がる海を見ながらファサードを進む。家に帰るという日常行為自体が儀式であり、ひとつのアミューズメントになる。  
 ②は、鉄扉と玄関を介するパブリックでフォーマルな(普通の)エントランス。そして③、海に出て、帰るときはここから。お父さんのヨット仲間が遊びに来て(奥様に気を使うことなく)デッキで一杯飲んで帰るとか。プライベートエントランス。

■「贅沢さって何だろう」と、改めて考えたんですね。それは、お金がないと実現できないものではないはず。でないと——設計士ではなく——僕ら建築家、デザイナーの存在意義がないですから(笑)。  
 この家のいちばんのご馳走は「海」ですね。だからといって、家のどこからでもべったり海が見える、海に直接的に接するというのは——ビーチリゾートはだいたいそういう造りになっていまして——贅沢でも上質でもない。言うなれば3食、暮の内弁当みたいなものです。げんなり。朝はトランプな和食で、昼はイタリアン、夜は鍋、みたいなほうが贅沢でヘルシーですよ。家のどこにいても、海の匂い、音、気配は感じる。けれど、海との接し方の深さ、質、いわばインターフェイスは、それこそ日替わりで一月保つほど用意しよう。

もうひとつの「現実」は2000万の予算です。建坪を抑える必要がある。じつさいこのプランは27・5坪に抑えています。けれど引き算で、ストイックにはしたくない。ひとつひとつの部屋はミニマルだけど、使い勝手はマキシマムに。そういうのって贅沢じゃないかも知れないけれど、必要最小限度で充分な、よく使い込まれた工具セットみたいで、上質だと思うんですよ。以上2点が、この家の主題です。

次ページの平面構成をご覧ください。海とのインターフェイス、で言えば、もつともダイレクト、FACE TO FACEなのは1Fの海に面したデッキです。ここは潮風も直接当たるし、場合によっては飛沫もかかる。この家の場合、他者の視線が少なく、家族と親友くらいしか出入りしない海側(3つのエントランス参照)がプライベートになるので、デッキは、主寝室とバスルームに通じます。両者は、海とのインターフェイスについてもデッキに準じ、主寝室は海に向かって全開放する折れ戸を持ち、朝、シーブリーズで揺れるカーテンにくすぐられて目覚めるとか、砂浜で眠っているような心地よさを得られます。

と連続する空間でフロアレベルも揃え、ランチワゴンを引き出せたりします。ここはあえて主寝室によってガードされ、海からの光と風の一部が遮られます。スケッチではベンチを置いていますが、気象や気持ちの状態によって、ここで読書したいときもあるでしょう。通常は、1Fプライベート、2Fパブリックというふうに振り分けるのですが、上記コンセプトにより、リビングはDKと分離し、2Fに置きました。このリビングからは、海はビューデッキと窓越しに「額絵」のように見えます。16畳とミニマルであるゆえに、ソファを置くことソファに占有され、使い勝手が限定されてしまいます。そこでフロアを楕円に掘り、カーベットを敷き詰めました。これにより、どこに座るか(背もたれるか)により、海が見えたり、山が見えたり、「使い勝手はマキシマムに」。